

高齢世代のくらしのビジョン

(1)就業

- ・ 65歳までの継続雇用が一般化し、希望する高齢者全員が継続雇用される。また、高齢世代の豊富な経験や人脈等のソフトな人的資産を活用して、他の企業への再就職が容易になる一方、高齢者自身がこれらの資産を活用して起業化することも増えてくる。
- ・ また、短期間・短時間就業の就業形態も一般化し、高齢者の選択や裁量の効く形で働けるようになる。フレックスタイム制が普及し、通勤の困難も伴わずに働くことが可能となる。
- ・ これらの多様な就業ニーズに対応するため、労働者派遣事業やシルバー人材センターの活用が進み、自分の条件に合った仕事を見つけやすくなる。
- ・ 適度に働くことによって、生きがいが高まり、健康の維持増進につながる。また、自立した生活のための所得を得ることができる。
- ・ コンピュータの知識など、最新の知識を習得するとともに、誰にでも使いやすい情報機器を活用して若年、中年層に劣らない生産性をあげることができる。

ある高齢世代のくらしのイメージ

- ・ 夫は65歳までの継続雇用が可能なところを60歳で退職し、前職で培った人脈とノウハウを生かして、高齢者向きの旅行コーディネート会社を興した。仕事には前職で覚えたコンピュータやネットワークをフルに活用している。コンピュータなどは高齢者にも使いやすいように改善が進んだものだと思う。また、コーディネートする旅行には同年代の添乗員を同行させている。
- ・ 妻は継続雇用を選択したものの、60歳以降は労働時間を短縮し、午後の早いうちに仕事を終え、夕方は身体の不自由な高齢者の話し相手になるボランティア活動に参加していた。現在は、ボランティア活動を主体に、時々夫の仕事を手伝っている。
- ・ 2人とも、職場での人付き合いや緊張感が生活の張りになるので、仕事は出来る限り続けたいと考えている。

(2)所得・消費・貯蓄・資産

- ・ 年金制度の成熟化や給付水準の適正化及び高齢者就業の増加によって、高齢者の基本的な生活ニーズを満たす所得が確保される。また、子育て世代、壮年世代の負担軽減に伴い高齢者に備えた貯蓄を高める一方、当該貯蓄等の資産を高齢者自らのために活用して、所得を補完するようになる。
- ・ 介護サービスなどの生活支援サービス、高齢者向け商品等の開発が進み、高齢者市場が拡大する。また、公共サービスの提供に際しても、低所得者への配慮がなされる一方、適正な利用料負担を課すことにより、高齢者の資産や所得をサービスの購買力に結び付けるようになる。
- ・ 高齢者が所有する不動産等を生前の生活保障のために活用することによって、所得等を補完し、サービス提供を受けることができるようになる。
- ・ 内外価格差の是正・縮小により、安い商品が手に入りやすくなり、生活が一層楽になる。一方、消費者にも商品の善し悪しを判断する力が求められるようになる。
- ・ 内外価格差の是正・縮小により、物価が安定し、不安なく年金や貯蓄資産等を活用して生活することができる。

ある高齢世代のくらしのイメージ

- ・ 年金と給与で生活には困らず、孫に玩具を買ってあげることも楽しみの一つになっている。また、年に数回2人で行く趣味の海外旅行にはこれまでの貯蓄を充てている。今後は、リバースモーゲージ制度を利用して生活資金をまかなうことも考えている。
- ・ 家族は遠くに住んでいるので、疲れた時や、病気になった時には、家事サービスを利用するようにしている。頼めばすぐに人に来てもらえるということが安心感につながっている。
- ・ 内外価格差が縮まってきたため、生活必需品なども安く購入できるようになった。
- ・ 外国製の高齢者向け商品にはアイデアの豊かなものが多く、重宝している。
- ・ 物価が安定しているお陰で、年金と給与で安心して生活設計ができる。
- ・ 機能を少なくしたビデオ、表示やスイッチの大きな家電等、高齢者に使いやすい商品が増えており、買換えの時はこれらを選んでいく。

(3)住まい

- ・ リフォーム市場が整備され、住み慣れた住宅においても生涯を送れるよう住宅内部のバリアフリー化が進められる。また、短時間でアクセスできる圏内（徒歩圏内等）に介護サービスなど、在宅生活サービス支援を受けることのできる公的又は民間の保健福祉関連施設が整備される。
- ・ 中古住宅の流通市場が整備され、高齢者向けの住宅への円滑な住み替えが可能になる。また、公共賃貸住宅においてもケア付き住宅等の整備が進められることにより、高齢者が適正な負担で安定的に賃貸居住を行うことができる。
- ・ バリアフリーのまちづくりの進展等により、高齢者も安全かつ円滑に日常生活を送ることができるようになる。

ある高齢世代のくらしのイメージ

- ・ 子どもが独立してから移り住んだ今の住まいの環境が気に入っているので、今後も住み続けられるようにバリアフリー化してある。身体に不自由のない今でも、出入口のスロープ、段差のない室内、風呂場やお手洗いの手すり等には重宝しており、家庭内での事故防止にもなっている。

(4)健康・医療・介護等

- ・ 健康カードなどを活用した予防医療・保健サービスの推進により、痴呆症の防止など、身体機能の維持増進が図られる。
- ・ 情報通信ネットワークや情報通信機器を活用した遠隔医療によって、在宅で簡易な問診や健康相談等を受けることができるようになる。
- ・ 医療、福祉を連携させ、効率的なリハビリ等を実施することにより、身体機能の低下防止、回復が図られる。
- ・ 急性疾患、慢性疾患、介護対応型、終末期等それぞれの症状にきめ細かく対応した効率的・適正な医療が提供される。特に、慢性疾患、介護対応型において過剰な医療資源の投入を排除し、患者本人にとっても満足のいく医療が提供される。
- ・ また、医療（関連）サービスのうち、生活的・介護的な要素の強い部分については、公的介護保険に基づき、従来の医療保険の枠組みとは別の適正な負担を負う。
- ・ また、慢性疾患、終末期等については、住み慣れた在宅における医療を受けることができるようになる。
- ・ 介護を必要とする高齢者が希望に応じて、在宅や施設の介護サービスを受けられるようになる。この際、公的介護保険や公的補助等の下で、公的サービスと健全な民間サービスとの競争条件を整備し、希望に応じて、適正な負担でどちらのサービスも選択できるようになる。

ある高齢世代のくらしのイメージ

- ・ 検診データや治療歴の入った健康カードを持っているので、かかりつけの診療所だけでなく、他の病院や健康増進施設等で容易に的確な診察やカウンセリングを受けることができる。病気の予防や早期発見にたいへん役立っている。
- ・ パソコンを利用して糖尿病の妻の血糖値や二人の血圧、脈拍等を記録し、情報通信ネットワークを利用して医師の判断を仰いでいる。
- ・ 妻は交通事故のため、両足を骨折したことがある。糖尿病でもあるので心配されたが、病院でのリハビリと退院してからの訪問看護で歩行には不自由しなくなった。また、情報通信ネットワークで送られてくる食事指導に従った結果、糖尿病の病状も安定している。
- ・ 夫の兄は痴呆症のため自宅近くの介護施設に入っている。この施設はグループ介護を行っており、家庭的な雰囲気知られている。費用は公的な介護保険で補填されている。
- ・ 夫の兄を二人で訪問する度に、どちらかに介護が必要になった場合にどうするのかを話し合っている。最近では公的介護保険もあり、公的施設、民間施設のどちらを利用しても同じようなサービスの水準であれば負担はそれほど変わらない。その上、それぞれの施設が特色を打ち出しているので選択に迷うほどである。また、在宅サービスも充実しているため、住み慣れた自宅も離れたい気がしている。
- ・ 終末期については、丹精した庭の見える自宅の部屋で終末期医療サービスを受けていた妻の姉のようにありたいと考えている。

(5) 学習・教育（自己啓発）

- ・ 大学等における公開講座や社会人入学の枠が広がり、高齢者学生が増加する。また、公共機関等や民間教育産業等の提供する講座も多くなる。これにより、職業能力開発やその他社会参加のための生涯学習が盛んになり、就労のみならず様々な社会活動が可能になる。

ある高齢世代のくらしのイメージ

- ・ 海外旅行に備えて二人で大学の公開講座でスペイン語を習いはじめた。スペイン語の前は英語で、妻は英検1級を取得している。
- ・ 夫は、旅行で訪れた外国の文化について地域の講演会で何度か講演したことがあるが、これを学問的に研究するために、仕事から引退したら大学院で比較文化を専攻したいと考えている。
- ・ 妻は、夫の仕事を手伝うため市民講座でコンピュータ操作を学んでいる。

(6) 余暇・社会参加

- ・ 余裕のある時間を活用して、様々な地域活動に参加するようになる。また、様々な生涯学習メニューを利用して、知識や技能を高め、ボランティア活動にも積極的に参加する高齢者が増加する。
- ・ 閑散期などの低廉な料金を利用して、旅行やレジャーを楽しむ高齢者が増える。
- ・ 情報通信ネットワークにより高齢者の社会参加の機会が増大する

ある高齢世代のくらしのイメージ

- ・ 余裕のある自由時間を利用して、夫は地域での講演会等の地域活動、妻は福祉ボランティア活動に参加している。
- ・ 混み合う時期を外して低廉な費用で旅行出来るようになったので、高齢期になっても、以前より気軽に旅行できるようになった。
- ・ 情報通信機器を用いた「遠隔お花教室」に参加するなど、必ずしも外出しなくても充実した余暇を送れるようになった。
- ・ 子ども会や小学校の野外体験学習に赴き、子ども達に昔の生活や自然の体験、遊び方などを伝えている。

(7) 災害への備え

- ・ 行政と地域が協力して、災害時の高齢者避難マニュアルが地域ごとに策定され、高齢者の迅速な避難、救助への備えが講じられる。
- ・ 住宅・社会資本等の耐震性の強化が進み、地震が発生した場合の被害の軽減が図られる。また、水害、がけ崩れ等への対策が進む。
- ・ 地震保険への加入率が高まる等、個人レベルでの地震への備えが進む。
- ・ 災害時に備えたボランティア団体の組織化、ネットワーク化が進み、これにより地域住民間の連携も深まる。

ある高齢世代のくらしのイメージ

- ・ 現在住んでいる住まいは、耐震性能も優れ、安心してくらししている。また、日頃から地域の人や市役所の職員と避難方法など話し合い、年に2回避難訓練を行っている。
- ・ 市役所から小型無線機器が配付されており、緊急時の連絡ができるようになっている。
- ・ 高齢者でも避難しやすいよう、避難場所としての公園などの整備が進んだ。